博 士 論 文 の 要 旨 及 び 審 査 結 果 の 要 旨

氏　　名	西方　真弓
学　　位	博士（保健学）
学 位 記 番 号	新大院博（保）甲第33号
学位授与の日付	令和元年　9月20日
学位授与の要件	学位規則第　条第　項該当
博 士 論 文 名	当事者視点に基づく母体・胎児集中治療室入院妊婦の個人的QOL
論文審査委員	主査　教授　宮坂　道夫
	副査　教授　定方　美恵子
	副査　教授　村松　芳幸

博士論文の要旨

母体・胎児集中治療室（MFICU）に入院するハイリスク妊婦（MFICU入院妊婦）は、母体や胎児の医学的管理と安全性の確保のために面会や行動が制限され、生活の質（QOL）に問題を抱えていることが指摘されている。しかし、MFICU入院妊婦についての先行研究は、標準化されたQOL尺度を用いた調査がわずかに報告されているにすぎない。標準化されたQOL尺度は、個々の疾患や特異的な問題点の評価には適していないため、MFICU入院妊婦のケアの手がかりを得るには、個人的QOL尺度を用いた調査が必要である。本研究は、個人的QOL尺度の1つである「生活の質ドメインを直接的に重みづけする方法（the Schedule for the Evaluation of Individual QoL Direct Weighting、SEIQoL-DW）」を用いることにより、MFICU入院妊婦の個人的QOLの特性を明らかにし、彼女たちの医療管理とQOLとの調和を図ったケア計画立案と療養環境の改善のための示唆を得ることを目的として、総合周産期母子医療センターのMFICU入院妊婦20名を対象に面接調査を行ったものである。

対象者の個人的QOLの総合評点であるSEIQoL index scoreの平均値は62.0±21.4であった。対象者が挙げた個人的QOLの主要な構成領域であるcueの総数は95で、13のカテゴリに分類された。最もcueの数の多かったカテゴリは〈家族との関係〉であり、広範囲の家族が対象者の重要なQOL構成要素となっており、一時的にでもその人達の世話をできないことがQOLにネガティブな影響をおよぼしていた。入院によって胎児の健康状態が維持されていると認識している対象の場合、そのことが彼女たちの主要なQOL構成要素になっていたが、SEIQoL index scoreが低い群では、〈胎児の成長・健康〉に分類されるcueを挙げない傾向にあった。病院の制約の中で自分を清潔に保つことについてはある程度の満足が得られており、ベッド上で過ごす多くの時間の使い途を見つけられた場合は、それらが満足度の高いQOL構成要素となっていた。その一方で、食事、自由に動けることへの対象者の欲求は、MFICUの入院生活においては充分に満たされていなかった。以上から、面会制限の緩和や、家族とのプライベートな時間を過ごせる面会スペースの確保、および、医療者から胎児の健康状態や日々の変化に関する詳細な情報を得てMFICUに入院していることの意味を実感できるような肯定的なフィードバックを提供すること等の重要性が示された。また、食事や自由に動けることに関するサービスを改善することでMFICU入院妊婦のQOLの向上が図れる可能性

があることも示唆された。

審査結果の要旨

1.保健学（看護学）に貢献しうる研究意義について

本研究が保健学（看護学）に貢献しうる研究意義は２点に集約される。一つは、MFICU 入院妊婦の QOL という従来の研究が光を当ててこなかった課題を取り上げ、その特性を細部にわたって明らかにしたという点である。わが国では、周産期医療の進歩、晩婚化による高齢出産の増加、生殖補助医療による多胎妊娠の増加などにより、いわゆるハイリスク妊娠が増え、入院施設として MFICU の設置が進められてきた。こうした中で、MFICU に入院する当事者である妊婦に焦点を当てた実証研究は少なく、とりわけ長期にわたって制約の大きい入院生活を強いられる中での QOL の特性を明らかにした意義は大きい。

もう一つは、その QOL の探求を「個人的 QOL」として設定した方法論の新規性である。従来の QOL 研究の多くが、QOL の構成要素を標準化・固定化されたものとして設定した尺度を用い、対象集団の QOL 評価や治療介入の効果の測定を行ってきた。ところが、こうした方法論では、治療・介入に反応しない集団では効果が測定しにくいこと、QOL の構成要素が個人によって多様であること、および時間や病状によって構成要素そのものが変化しうること、といった QOL の複雑な側面を捉えにくいという弱点が指摘されてきた。本研究では、こうした弱点を補うために開発された個人的 QOL の測定方法である SEIQoL-DW に着目し、これを MFICU 入院妊婦に適用しており、これによって MFICU 入院妊婦の QOL の特性を詳細に記述することができ、それらをカテゴリー化して相対的重要度（weight）と満足度（level）の高低を分析することで MFICU におけるケア計画立案と療養環境の改善のための示唆を得ることに一定程度成功している。こうした実証研究は国内外に例がほとんどなく、独自性の高い研究と評価できる。

2.論文の構成と内容についての審査について

「序論」において、日本の周産期医療の現状と MFICU の入院環境、MFICU 入院妊婦およびハイリスク妊婦の母親役割獲得過程の準備段階、QOL 評価方法、の３点が先行研究の概観をもとに論じられ、個人的 QOL 尺度である SEIQoL-DW を用いて MFICU 入院妊婦の個人的 QOL の特性を明らかにし、個人的なケア計画立案と療養環境の改善に向けた示唆を得るという本研究の目的が十分な学術的意義を有することが理解される内容となっている。「研究方法」においては、研究デザイン、対象者の設定、データの収集と分析の方法、信頼性、倫理的配慮の６点が述べられ、研究目的の実現のための方法論が妥当であることが確認できる。「結果」において、１．対象者の概要、２．cue の概要、３．高群・低群の比較が記述され、MFICU 入院妊婦の個人的 QOL の特性を明らかにするという、目的の前半部分に該当する内容が詳述されている。「考察」においては、１．ハイリスク妊婦の個人的 QOL の特性、２．MFICU の療養環境の改善に向けてという２つの大きな論点が設定され、結果として得られた新知見が先行研究を参照しながら整理されるとともに、個人的なケア計画立案と療養環境の改善に向けた示唆を得るという目的の後半部分に該当する内容が確認できる。続けて、研究の限界が論じられ、調査の規模、SEIQoL-DW 自体の持つ限界などが簡潔に述べられている。こうした限界に鑑みても、本研究が明らかにした知見は、今後行われるであろう MFICU 入院妊婦の QOL についての研究に対して具体的な示唆を与え、助産師等の看護職にとってより大きな知見を得るための研究領域を切り拓く可能性を持つものと思われ、十分に評価することができる。

3.総括

以上のように、審査の中で本論文の本質的な価値を疑うような疑義は提示されず、具体的な指摘事項に対する申請者の対応も十分なものと思われた。本研究成果は、わが国で加速する少子化の中で、ハイリ

スク妊娠の当事者の視点を踏まえながら、MFICU のあり方を再考し、ひいては今後の周産期医療施策を考える上でも示唆に富む貴重な基礎資料であり、学術的にも社会的にも価値を有するものと評価した。

以上より，論文審査委員 3 名の総意として，本論文は学位規則第４条第１項に定める博士（保健学）の学位を授与するに値する水準に達していると判定した。